

# 研究成果の発信

地球研では、研究成果を広く社会に還元するため、一般の方や研究者を対象にしたシンポジウム、フォーラム、セミナーなどのイベントを開催しています。また、総合地球環境学に関するさまざまな刊行物を積極的に出版しています。



第7回地球研国際シンポジウム

## 地球研国際シンポジウム

地球研の研究成果を世界に発信することを目的として、国内外の研究者コミュニティを対象に毎年開催しています。その年度に終了する研究プロジェクトの研究発表を中心に、最新の研究活動や海外諸国の地球環境研究の現状を紹介しています。

	テーマ	開催日	場所
第7回	複雑化・単純化するアジア生態系、ひとの健康と暮らし	2012年 10月24日～26日	地球研講演室



第11回地球研フォーラム

## 地球研フォーラム

地球研の理念や研究成果に基づいて、地球環境問題について幅広い提起やディスカッションを行なうことを目的に、毎年開催しています。2004年度からは広く一般の方の理解に供するために、その成果を「地球研叢書」として刊行しています。（地球研叢書については15ページを参照）

	テーマ	開催日	場所
第11回	“つながり”を創る	2012年7月8日	国立京都国際会館



第48回地球研市民セミナー

## 地球研市民セミナー

地球研の研究成果や地球環境問題の動向をわかりやすく一般の方に紹介することを目的に、地球研または京都市内の会場において定期的に開催しています。会場からは熱心な質問が毎回よせられています。2010年度から、夏休み期間中に小学生を対象とした地球研キッズセミナーを始めました。専門用語や難しい概念を使用せず、環境の大切さを伝えるよう努めています。外国の生活や調査のようすを研究員から直接聞けるということで、参加者から好評をいただいています。

	テーマ	開催日	講演者
第46回	新しいインダス文明像を求めて	2012年5月11日	前奈 英明（広島大学教授） 長田 俊樹（地球研教授）
第47回	東南アジアの環境破壊と食卓のゆくえ	2012年6月22日	嘉田 良平（地球研教授） 鞍田 崇（地球研特任准教授）
第48回	遠い世界に思いをはせる——アフリカでの開発支援をめぐる	2013年1月18日	田中 樹（地球研准教授）
第49回	参加体験型セミナー 自分という自然を生きる	2013年2月15日	中野 民夫（ワークショップ企画プロデューサー・同志社大学教授）

## 地球研キッズセミナー

	テーマ	開催日	講演者
第3回	「アルベド」って何だろう？	2012年8月3日	檜山 哲哉 (地球研准教授)



第3回地球研キッズセミナー

## 地球研オープンハウス

地球研では2011年度から、広く地域の方々との交流を深めるために、地球研の施設や研究内容を紹介するオープンハウスを開催しています。2012年度は、キッズセミナーやオープンハウスセミナー、実験室見学ツアー、スタンプラリーやプロジェクト訪問などを実施し、地球研内を自由に歩き回りながら楽しく身近に感じていただけるよう工夫しました。

	開催日	場 所
2012年度 地球研オープンハウス	2012年8月3日	地球研



2012年度地球研オープンハウス 実験室へ行くツアー

## 地球研地域連携セミナー

国内の大学や研究機関と協働で行なうセミナーです。地域には地域固有の地球環境問題があります。一方で、世界のさまざまな地域でも同様の地球環境問題がみられます。世界と日本で共通する課題について、地元の大学・研究機関・行政とともに、問題の根底を探り、解決のための方法を考えていきます。

	テーマ	開催日	場 所
第11回	東アジアの「環境」安全保障： 風上・風下論を超えて	2012年6月10日	福岡県福岡市
第12回	分かちあう豊かさ： 地域のなかのcommons	2012年10月13日	山梨県富士吉田市



第11回地球研地域連携セミナー

## 地球研東京セミナー

地球研の成果と今後のさらなる進展について、国内の研究者コミュニティや一般の方に理解と協力を呼びかけていくため、東京でのセミナーを開催しています。日本を代表する研究者や現場の問題を扱う行政関係者などを招いて、最新の成果と課題を討論します。2012年度は、2013年6月に「国際commons学会第14回世界大会(北富士大会)」が開催されるのに合わせて、「commons」をテーマとし開催しました。

	テーマ	開催日	場 所
第4回(人間文化研究機構第20回公開講演会・シンポジウム)	commons:豊かさのために分かちあう	2013年1月25日	有楽町朝日ホール



第4回地球研東京セミナー



第5回日文研・地球研合同シンポジウム

## 日文研・地球研合同シンポジウム

人間文化研究機構における新しい人間文化研究の可能性として、日本文化の研究が地球環境問題にいかなる貢献をすることができるかについて提案することを目的としています。

日本文化と地球環境問題、大きく異なる2つの分野の研究を行なう国際日本文化研究センター（日文研）と地球研が中心となり、地球環境問題の本質について積極的に対話しています。

	テーマ	開催日	開催場所
第5回	文化・環境は誰のもの？	2012年9月14日	日文研講堂



第4回京都環境文化学術フォーラム スペシャルセッション「エネルギーと地球環境の未来 — グローバルコモンズを目指して —」

## 京都環境文化学術フォーラム・国際シンポジウム

地球温暖化をはじめとする地球環境問題を解決するため、京都府、京都市、京都大学、京都府立大学などとともに、環境・経済・文化などの分野にわたる国際的な学術会議を2009年度から開催しています。生活の質を高めながら自然との共生や持続可能な社会を形成する新たな価値観や経済・社会のしくみを、京都から世界に向けて発信・提案することを目的としています。本国際シンポジウムは、「京都地球環境の日（2月16日）」の記念行事と位置づけ、「KYOTO地球環境の殿堂」表彰式と同時に毎年2月中旬に国立京都国際会館で開催しています。

## KYOTO地球環境の殿堂

「京都議定書」誕生の地である京都の名のもとに、世界で地球環境の保全に多大な貢献をした実務家、研究者などの顕彰を行います。その功績を永く後世に引き継ぎ、京都から世界に向けて広く発信することにより、地球環境問題の解決に向けたあらゆる国、地域、人々の意志の共有と取り組みの推進に資することを目的としています。本顕彰は、「KYOTO地球環境の殿堂」運営協議会（京都府・京都市・京都商工会議所・環境省・国立京都国際会館・地球研）が中心となり、環境分野の専門家、学識者、活動家などで構成する選考委員会で選考されます。

	殿堂入り者	職位	業績
第4回	ヴァンダナ・シヴァ氏	環境哲学者・物理学者	伝統的スタイルに根ざした価値観や社会構成の重要性など、環境と共生する思想の普及に貢献した
	エイモリー・B・ロビンズ氏	ロッキーマウンテン研究所理事長	エネルギー利用に関する学術研究の成果をもとにした先進的な戦略「ソフトエネルギー・パス」を提唱した



第4回KYOTO地球環境の殿堂 表彰式にてあいさつを述べるヴァンダナ・シヴァ氏



エイモリー・B・ロビンズ氏

## 地球研セミナー

地球環境問題に関する最新の話題と研究動向を共有し、広い視座から地球環境学をとらえようとするセミナーです。講師は、主として地球研に滞在中の招へい外国人研究員ですが、国内外を問わず、ほかの研究機関の研究者に依頼することもあります。公開セミナーであり、所員だけではなく所外からも多数参加しています。

## 談話会セミナー

原則月2回、昼休憩を利用して行なうランチセミナーです。地球研で求められているのは、多様な研究分野間の相互理解と、共通テーマである地球環境問題に関する不断の議論です。談話会セミナーでは、地球研の若手研究者が中心となって、各自の研究背景をふまえつつ、多くの所員に共通の話題を提供し、研究者相互の理解と交流を深めています。

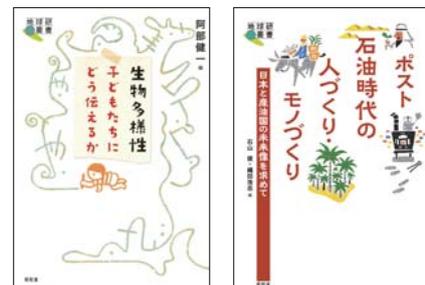


## 刊行物

### 地球研叢書

地球研の研究成果を学問的にわかりやすく紹介する出版物です。

タイトル	著者・編者	出版社	出版年月
生物多様性 子どもたちにどう伝えるか?	阿部 健一 編	昭和堂	2012年10月
ポスト石油時代の人づくり・モノづくり——日本と産油国の未来像を求めて	石山 俊、 縄田 浩志 編	昭和堂	2013年3月



### 地球研英文叢書

地球研の研究成果を国際社会に向け広く発信する、英文での出版物です。

タイトル	著者・編者	出版社	出版年月
The Dilemma of Boundaries	谷口 真人、 白岩 孝行 編	Springer	2012年5月



### 地球研ニュース (Humanity & Nature Newsletter)

地球研として何を考えているのか、またどのような所員がいて、いかなる研究活動をしているかなどの最新情報を、研究者コミュニティに向けて発信するもので、隔月で刊行しています。特に、地球研にかかわっている国内外の研究者を対象に、コミュニケーションの場のひとつとして機能することをめざしています。



### その他

地球研では上記のほかにも多様な刊行物があります。たとえば、さまざまな分野にまたがる研究プロジェクトの成果を事典という形でまとめた『地球環境学事典』を刊行しています。学術的な専門用語を使用せず、高校生にもわかるよう平易に記述するなど、工夫を凝らしています。

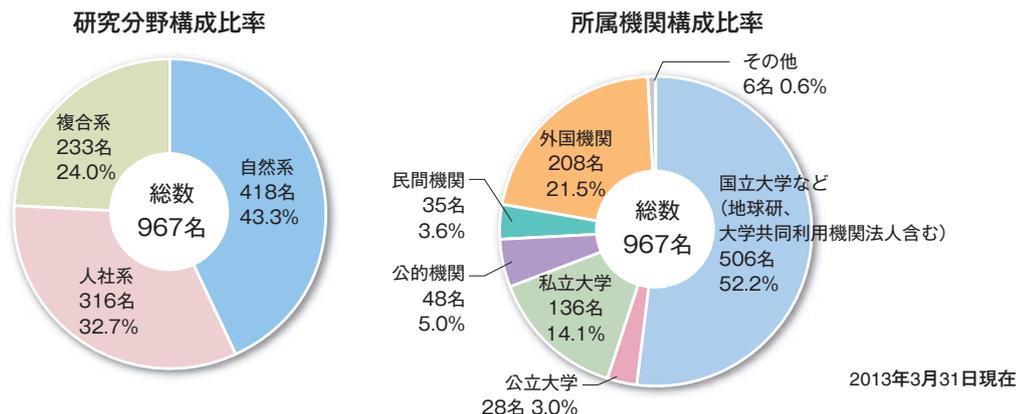
また、研究プロジェクトで取り入れている多様な地球環境学の研究手法を、大学生や自治体、研究者にわかりやすく紹介する『地球環境学マニュアル (仮)』や、最新の研究成果を研究者に向けて発信するための新しい出版の枠組みとして「地球研和文学術叢書 (仮)」の準備を進めています。



# 共同研究

地球研の研究活動は、所内の研究者やスタッフだけでなく、国内外の多くの研究者によって支えられ実施しています。コアメンバーやメンバーとして直接研究プロジェクトにかかわる研究者や、多様な連携活動を通じて、間接的にも多くの研究者の協力を得ています。そのような研究者が、専門分野も年齢も所属先も異なっているのは、地球研の大切な特色のひとつです。

地球研は、「知のコモンズ」であるべきだと考えています。そのためには、密接な連携とコミュニケーションが欠かせません。ときには意見や考え方の異なる多様な研究者が、寄り集い、議論を重ね、切磋琢磨しながら総合地球環境学の構築を行なう「開かれた」研究所をめざしています。



## 大学間連携を通じた広域アジアにおける地球環境学リポジトリの構築 ——環境保全と地域振興を目指す新たな知の拠点形成事業—— (略称：地球環境学リポジトリ事業)

2012年度より新たに開始した地球環境学リポジトリ事業では、地球研や国内外の諸研究機関が保有する人間と自然系の相互作用環に関する多様な地域環境の研究情報を、分野の異なる研究者間で双方向に利用可能な学術基盤（ネットワーク型のリポジトリ）を整備します。これにより、文理融合型の大学間連携・共同研究を推進し、地球環境問題の解決に資する地域と地球をつなぐ自然・文化融合型の新たな知を創造することをめざします。この事業は国内の国公立大学の研究センターなどとともに進めています。

### 国内の連携研究機関など

地球研は、2001年に設立されて以降、全国の研究機関などと人事交流をとまなう連携を図って研究を進めることを柱に共同研究を推進しています。

第Ⅱ期中期目標・中期計画期間においても、より多くの大学や研究機関と積極的に連携を深め、大学共同利用機関としての役割を果たしています。

#### プロジェクトリーダーを送り出した連携研究機関（法人化前の連携研究機関を含む）

- 1 京大大学生態学研究センター
- 2 名古屋大学地球水循環研究センター
- 3 鳥取大学乾燥地研究センター
- 4 国立民族学博物館
- 5 東京大学生産技術研究所
- 6 北海道大学低温科学研究所
- 7 琉球大学熱帯生物圏研究センター
- 8 東北大学大学院理学研究科
- 9 横浜国立大学大学院環境情報研究院
- 10 名古屋大学大学院環境学研究科

また、これら10の連携研究機関以外に、全国13の研究機関や行政機関などと学術交流などに関するさまざまな協定を締結することにより、組織横断的な学術研究の推進や相互の研究および教育の充実・発展に取り組んでいます。

**学術交流などに関する協定を締結している研究機関  
(締結順)**

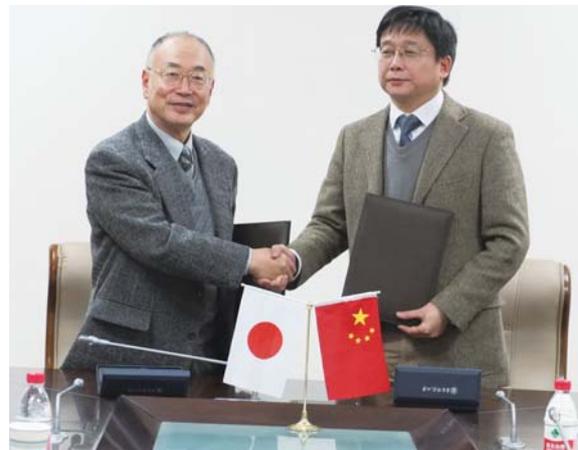
1 名古屋大学大学院環境学研究科
2 九州大学東アジア環境研究機構
3 同志社大学
4 長崎大学
5 京都産業大学
6 鳥取環境大学
7 宮城大学

**学術交流などに関する協定を締結している行政機関  
など (締結順)**

1 西条市
2 国際commons学会／富士吉田市外二ヶ村恩賜 県有財産保護組合
3 京都市青少年科学センター
4 京都生涯教育研究所
5 日本穀物検定協会東京分析センター
6 農林水産消費安全技術センター

**海外の連携研究機関**

地球研では、海外の研究機関・研究所などとの間で積極的に覚書および研究協力協定を結び、共同研究の推進、研究資料の共有化、人的交流などを進めています。また、海外の研究者との連携をさらに密にするため、招へい外国人研究員として各国から多数の著名な研究者を招いています。なお、2012年度は、アメリカ合衆国、エジプト、中国、ナミビアなどの海外の研究機関と6つの覚書または研究協力協定を締結しました。



華東師範大学（中華人民共和国）との覚書締結（2013年1月）

**覚書および研究協力協定の締結（2013年4月1日現在）**

\*は2012年度に覚書を締結した研究機関



# 人間文化研究機構のなかの地球研

地球研は、国立大学法人法に基づき、2004年4月1日に設置された大学共同利用機関法人人間文化研究機構（地球研のほか、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、国立民族学博物館、以下、機構）の一員となりました。地球研としての独自の研究を推進する一方、機構の進める連携研究、研究資源共有化推進事業、地域研究推進事業などの新規事業に加えて、公開講演会・シンポジウムなど、同機構主催の諸事業や共同利用活動に積極的にかかわっています。特に、連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」を地球研、国際日本文化研究センター、国立国語研究所が中核機関として進めています。また、機構による地域研究推進事業「現代中国地域研究」の一拠点として、「中国環境問題研究拠点」の研究活動を進めています。

人文社会系の研究機関を中心とする機構のなかで、地球研は自然系アプローチを含む統合的な地球環境学の研究を人間文化の問題として位置づけ、重層的かつ多面的な共同研究・共同利用を行なう機関として未来に向けて大きな可能性を秘めています。

## 連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」

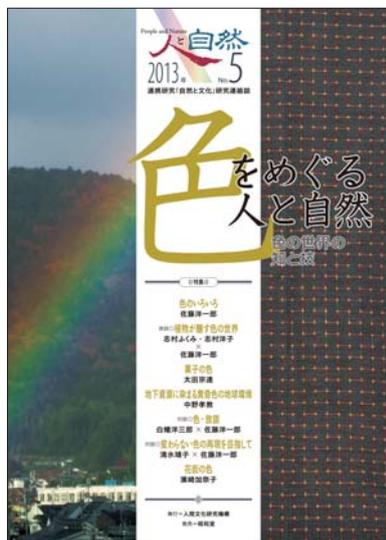
「日本およびアジアにおける『人と自然』の相互作用に関する統合的研究：コスモロジー・歴史・文化」

本研究は、人間文化研究機構の連携研究として行なうものです（通称：「自然と文化」）。「自然と文化」の研究では、人と自然の多様なかかわりを考古、歴史、民族（俗）、環境、思想などの多様な観点から解明することをめざしています。特に、日本や広くアジア地域における集団を対象として、それぞれの集団が自然とのかかわりのなかではぐくんできた、歴史や文化とその体系としてのコスモロジーに注目して研究を実施します。人は自然界の資源を生活や生存のために利用するだけでなく、自然を模倣し、あるいは自然を映す独自の表象として、技術、絵画、詩歌、造形物などをとおして自らの文化に取り込んできました。歴史的に多様な形で展開してきた人と自然の相互作用を、多面的なアプローチから明らかにすることが研究の大きな狙いです。



あえのこと（田の神様に豊稔を祈り感謝する民俗行事）（能登町・石川県）

この連携研究には、地球研のほか機構に属する5つの機関の研究教育職員や、全国の国公立大学の教員が共同研究者として参画しています。本研究は2010年6月に開始し、共同研究会、現地調査を開催してきました。2013年度以降も、日本国内各地やアジア地域を対象とした調査研究を実施します。



「人と自然」第5号

研究組織として、言語を中心とする自然認識や民族（民俗）分類を扱うグループ、絵画・図像などの造形物や儀礼、民間伝承、民俗知などを中心に扱うグループ、自然の開発や管理をめぐる制度や慣行を扱うグループに分けて、研究を進めています。

また、研究連絡誌として『人と自然』を年に2冊刊行しています。創刊号では特集として「火」を取り上げ、火を主題とする人と自然の多様なかかわりを独創的な視点から展開しました。つづいて、第2号（特集：音をめぐると人と自然——音とことばの接点）、第3号（特集：虫をめぐると人と自然——虫にこめられた多様な意味）、第4号（特集：天をめぐると人と自然——天と人とのつきあいの歴史）、第5号（特集：色をめぐると人と自然——色の世界の知と技）を刊行しました。2013年度も人と自然にかかわる特集として、第6号では「花」をテーマに幅広い視点から取り上げる予定です。今後も興味ある課題を企画していきます。

## 中国環境問題研究拠点

中国環境問題研究拠点は、人間文化研究機構の現代中国地域研究推進事業の一環として、全国6つの大学や研究所に設置された研究組織のひとつです。これは、日本における現代中国研究のレベルアップ、学術研究機関間のネットワークの形成、次世代の研究者養成を目的として、地球研のほかに早稲田大学、慶應義塾大学、東京大学、東洋文庫および京都大学に設置されたネットワーク型の拠点形成事業です。2007～2011年度の第Ⅰ期5年が終了し、2012年度から第Ⅱ期が始まりました。第Ⅱ期では、新たに愛知大学、法政大学がネットワークに加わりました。

地球研では、地球環境問題の解決に資する複数の研究プロジェクトを中国各地域で実施しています。第Ⅰ期では、これら研究プロジェクトの成果を、「開発による文化・社会の変容」という視点から、中国の環境問題を自然・人間文化の両面にわたって相対的にとらえようとしてきました。具体的には、中国環境問題にかかわるテーマを年ごとに設定し、研究会やフォーラム、国際シンポジウムを開催してきました。2007年度は「水」、2008年度は「食と農」、2009年度は「都市と農村」をテーマとしました。2010年度は研究プロジェクト「熱帯アジアの環境変化と感染症」と協力して、「エコヘルス」と経済的に影響力を拡大する中国の最前線のひとつである「西南中国」をテーマとしました。2011年度からは新たなネットワーク形成と研究プロジェクトのシーズの発掘を行なうことを目的に、中国の大学と共同で、大学院生を対象とした「地球環境学講座」を開講しました。地球研内外の拠点構成員を中心とした講師陣によるリレー講義の形式で、2011年12月には南京大学、2012年2月、2013年3月には北京大学で行ないました。南京では、江蘇省や無錫市などの環境行政担当者への講義も行ない、地域との対話から、環境問題をともに考える試みとしました。この地球環境学講座は、今後もテーマや方法を工夫しながら継続していく予定です。

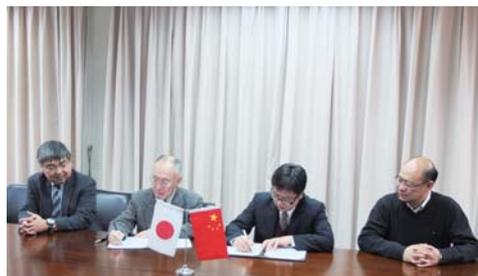
2012年度から始まった第Ⅱ期では、第Ⅰ期で培ったネットワークを基礎に、中国を中心とした周辺各国を含む東アジア圏を視野に入れ、今後予想される少子高齢化を考慮し、住民の生活基盤の向上とリージョナルな資源開発・環境保全とを両立させる「グローバル化する中国環境問題と東アジア成熟社会シナリオの模索」をテーマとしています。

中国を対象とした地球研の研究プロジェクトの多くが終了しつつあることもあり、新たな研究シーズの発掘、協力関係の構築に努めています。2012年10月には、華東師範大学社会発展学院と合同で研究会「中国環境問題の過去・現在・未来——環境保護型の社会構築へ向けて——」を開催し、2013年1月には今後の共同研究に向けて覚書を締結しました。また、2013年1月には、終了プロジェクト「病原生物と人間の相互作用環」で協力関係のあった上海交通大学に協力いただき、国際シンポジウム「湖の現状と未来可能性」を開催しました。そこでは上海交通大学や地球研以外に、九州大学東アジア環境研究機構、滋賀県立琵琶湖博物館、アジア経済研究所などからの参加者を得て、今後の新たな共同研究を模索しました。さらに2013年3月には、北京大学とも覚書を締結しました。

設立当初より、ニュースレター『天地人』を定期的に発行し、本研究拠点での成果を発信するとともにネットワーク形成に努めてきました。また、書籍の刊行や研究成果報告書シリーズの発刊を行なっています。2012年には、KYOTO地球環境の殿堂で表彰された故原田正純氏の著書『水俣病』の中国語訳の発刊にも協力しました。



2013年1月13日に上海交通大学で開催された国際シンポジウム「湖の現状と未来可能性」のようす



2013年3月13日に拠点が中心となって、北京大学と覚書を締結



『天地人』第19号